

多賀台 奈良 孝次郎

3. 〈じゃがいも栽培の仕方〉

「市川日記(県重宝)」では、じゃがいもが不作時の食生活に欠かせない作物であることから、その栽培の仕方について、図入りで細かく伝えている。

「畑は赤土で砂まじりのやわらかいところが最もよろしい。」「土は年末の冬に一度耕しておく。」「春になったらさらに耕し、馬肥を入れ土を寄せる。」「1尺2・3寸(40センチぐらい)の間をおいて穴をあけ、肥を少しづつ入れる。」「その穴へ種いもを一つずつ入れて土を被せておく。」そして8月下旬から9月初旬に掘り下げる。このような栽培の仕方が村人に伝承され、今に至っている。

4. 〈じゃがいもの役割の重要さ〉

30年以上も前のことになるが、わたしはドイツのホテルに数日間滞在したことがある。その際の食事によくじゃがいもが利用されていた。ステーキと一しょだったり、じゃがいものスープ・野菜サラダの中やコロツケだったり。それもその日だけでなく連日なのである。それらを食べながら「ドイツはじゃがいもの国だ」と思ったものである。ほかにポーランドやハンガリーなども共通する。

今、天保の頃の気候変動の再来も予想されるが、不作に強いじゃがいもの栽培や利用の方法を一層工夫してゆく必要があるようにわたしは思っている。(了)

鈴木與兵衛氏と五戸八幡宮(1)

〔轟木村與兵衛先祖也〕

轟木下 木村 隆一

1. 《旧轟木小学校学区民と檀家》

旧轟木小学校学区に古くからお住まいの方々は、三戸郡五戸町にあるお寺の檀家が多い。轟木や旧和野地区の鈴木氏、尻引の川村氏、向谷地・高屋敷の方々の多くは主として**専念寺**、旧新田地区の濱氏、風穴氏は**高雲寺**(谷地氏の一部はおいらせ町の**聖福寺**)等である。

神社についても、鈴木與兵衛氏と五戸八幡宮との関係について、以下のように伝えられている。

2. 《「五戸月山正八幡宮建立由来記」より》

元暦(1184年、今から824年前)のころ、奥州羽黒山の中腹に一人の鍛冶が住んでいた。名前は「月山」と呼び、この山中で刀を鍛えていた。

常に八幡宮を信じていたが故あってその子孫が尊像を守り、貞応(1222年、今から786年前)のころに**三戸郡の轟木村**に来住。

子孫と共に信仰し、代々ここに住み続けたが、五戸の御城代・木村奎氏の永正4年(1507年、今から501

(五戸八幡宮の正面)



年前)に、轟木村から**上新井田村**、現在の**五戸町根岸**に社地を移した。(以下、次号)

*資料:「五戸町誌」
「流れる五戸川」
「青森県の神社」
ほか

(写真は木村隆一)

